

「水俣に導かれて41年」芥川仁（写真家）

■講師プロフィール：芥川 仁（あくたがわ・じん）

1947年愛媛県生まれ。3歳から高校卒業までを宮崎市で過ごす。1970年法政大学社会学部二部（夜間部）卒業後フリーランス写真家。1973年から5年間東京都伊豆大島に滞在し島の暮らしと風土を取材。1978年12月から熊本県水俣市に約2年間滞在し水俣病事件を取材。近年の約15年間は全国の中山間地と漁村の暮らしと風土を取材。2017～18年の2年間は香川県小豆島を取材。1980年から現在まで宮崎市在住。

■主な写真展：「6・3制 夜間中学の顔」（東京都） 「水俣・厳存する風景」（東京都） 「土呂久鉍毒追想」（東京都） 「植物の記憶」（宮崎県・東京都） 「輝く闇」（福岡県・新潟県・宮崎県） 「MINAMATA」（フランス・パリ） など

■主な写真集等：「水俣・厳存する風景」（水俣病センター相思社） 「土呂久・小さき天にいだかれた人々」（葦書房） 「輝く闇」（葦書房） 「銀鏡の宇宙」（海鳥社） 「リトルヘブン」（葦書房） 「春になりては 椎葉物語」（北斗出版） 「里の時間」（岩波新書・共著） など

■取材ノートから聞き書きの一部を紹介します

木下レイ子さん（胎児性患者小崎達純さんと母キヨ子さんについて・2008年10月16日メモ）

「もう孫がおってん良か歳になって、親の面倒を看てくれるような歳になって、あげん姿を見れば、腹の底から煮えくり返るごつあつと。何年経ってん、そん気持ちは変わらんと」

梅戸港で海から釣り竿を持って上がってきた少年（中3）との会話（2011年9月23日メモ）

「将来何になりたいか決まっているの」「はい」「何になりたいの」「板金屋さん」「お父さんが板金屋さんなの」「はい」

氏名不詳（2013年2月18日メモ）

「父の日記に書いてありました。『7月17日、チッソから賠償金を受け取る。身売りしているようで悔しい』と。私たちは生きています。生きて以上、働かなければなりません。被害というのは日々の生活の中にあると思います」

佐々木徳明さん（64・大泊港・2014年6月10日メモ）

「稚魚というのは春と秋に生まるっとですよ。チリメンの一杯入った時にゃ、他の魚は入ってこんとですよ。不思議なもんですね。チヌとかタイとか、ほとんど春に生まるっとですよ。春白子は底におととですよ。秋白子は浮いととですよ。地曳網に入るタチは馬鹿たい。あげんゆっくりんとに入るもんな。昔ゃこら辺の海は何の稚魚でんゾロゾロさるきよったですが、こん海は変わってしもたですもんね。海藻も着かんごつなってしもたですもんね。海藻がなからんば稚魚はつかんですもんね。20歳の時から一本釣りでやってきととですよ。30代、40代ごろはタチウオでも釣り行ったら、一回で100キロぐらい釣ってきよったですもん。今じゃ何でご飯食べたら良かか分らんとですよ。海藻が変わったですよ。昔はワカメが1月に着きよったてすよね。今

は3月ですもん。水温がずれてきよっとですよ。タチウオなんかは水温が上がれば浮いてくっ
ですよ。それが浮いてこんですもん」

上村好男さん（水俣病60年を問うシンポ・長女智子さんについて・2016年3月12日メモ）

「一度でいいから、お父さんお母さんと呼んで欲しかった」

坂本フジエさん（水俣病60年を問うシンポ・2016年3月12日メモ）

「（長女真由美さんが劇症型で昭和33年1月3日に亡くなったと話しをした後）しのぶは元気に産
まれたから良かったと思っていました。少し成長する他の子どもと違うなあと思って病院に連れ
て行ったけど、脳性麻痺と言われた。なぜ海岸端ばかりに脳性麻痺の子どもが生まれるのかなと
思っていました。昭和37年11月に胎児性水俣病と診断され、私は隠そうとは思わなかった。水俣
病の症状はひとり一人違います。13年間はチッソの言いなりに動いてきました。昭和34年にチッ
ソから見舞金の話があった時、会長から『これを決めてもらわんば、どっからもお金は出らんと
よ』と言われました。裁判ちゅうとは恐ろしかったです。でも今も裁判して良かったなと思っ
ています。今でもやっぱりチッソは強いです。まゆみの分のお金を返して『まゆみを生き返らせ
てください』と言いました。最後はやっぱりお金になってしまうとです。今でもやっぱりチッソは
強いし、弱い者はいつまでも弱いです。水俣病の終わりということはないと私は思います」

明神岬の大きなハゼの木の傍らで母娘らしき女性2人から声を掛けられ（2016年5月4日メモ）

「これ（ハゼの木）も100年以上も生きとつとに伐つとは可哀想で……。何の役にも立たんとや
けど、根元に座って涼むとに良か。ハゼ負けすつで誰でんはでけんとです。私の母がこん（前
田家）に嫁に来た時にゃもうこげん大きかったと言いよつたもん。去年もう一年行きとれば100
歳になつとやったけど……」

先の女性の娘らしいと思われる人「今は枝を切られてしまったけど、こんハゼの木に父がブラン
コを作ってくれて、海に向かって飛ぶもんだけん気持ち良かったい」

金子雅子さん（61・親雄さんの妻・雄二さんの義姉・2019年1月24日メモ）

「こんど生まれてきてもお父さん（親雄さん）と巡り会いたいです。そして雄二さんと家族になり
たいです。雄二さんが愛おしいです。雄二さんは、最近好きな寿司も喉を通らず、年々衰える不
自由な体でも、食べたい、自分の脚で歩きたいという望みを捨てず、たくさんの方に助けてもらい
ながら歯を食いしばって生きています。お母さん（金子スミ子さん・2016年に84歳で亡くなる）
が語り部になったのは『妻として母として、同じ苦しみを世界中の女性に味わってもらいたくな
い』との思いからでしたね」

金子博さん（71・潮見町・2019年10月20日メモ）

「ここは熊本県環境センターの代替地で取ったですよ。120坪の畑。週一回来て草をかがっ
とる訳ですよ。それが先祖の供養だと思つてですね。ま、やれることをせんばいかんと思つて
ですね。親父がスコップとツルハシで作つた畑ですから、それを思うと草は生やされんと
ですよ。こん畑は赤土だから明神の唐芋といえはプレミアが付くとですよ」

■「水俣に導かれて41年・今考えていること」

田舎の高校を卒業するまで社会問題に目を向けることなく漠然と写真家という職業に憧れを抱く幼稚だった私は、大学の夜間部に入学し周りの大人たちに目を覚まされる。時は、70年安保、大学紛争、公害列島、三里塚空港反対闘争など、社会問題が山積み。そんな時代状況にも影響を受け、ベ平連のデモに参加し大学内での討論集会に参加するなど少しずつ社会問題に目を向け始めた。卒論には沖縄の返還運動をテーマにし本土復帰前の沖縄を訪問したこともある。水俣病事件の闘いは裁判が始まり、全国に支援組織「告発」の支部が出来て、毎日のように「水俣」をニュースが伝えたが、私は、水俣との係わりを持たなかった。ニュースで伝えられる被害の深刻さと闘いの過激さに圧倒され、無意識のうちに避けていたのかも知れない。

大学卒業の時が来て、夜間部では就職できる会社もなく、いよいよフリー写真家として仕事をしていかなければならない。グラフィジャーリズム全盛の時代で、技術もコネもない駆け出しの若い写真家でも、取材して編集部へ作品を持ち込めば採用と没が半々くらい。原稿料が入れば、そのお金で次の取材をし、没になればアルバイトで取材費を貯めて次の作品を撮るといった生活が始まった。そんな繰り返しの中、私が育った宮崎県の山中で隠された公害が告発という大ニュースが紙面に踊る。高千穂町の土呂久鉍毒事件だ。これぞ自分のテーマと直感した。ただ貧乏写真家はすぐに土呂久へ取材に行くことはできない。それから2年が過ぎて、ようやく土呂久の村を訪ねた。しかし、その時すでに宮崎県のすばやい対応で被害者は7人だけ、県知事が最後の鉍業権者住友金属鉍山と被害者の間に立って補償斡旋を行い、土呂久公害は終わったという空気が流れていた。

それでも実際に当時51世帯の村を歩き村人の話を聞くうちに、県知事斡旋で被害者は納得していないことが伝わってくる。県が発表した7人以外にも多くの住民が健康被害を訴えていると知った。土呂久公害の健康被害の認定要件は、①皮膚に角化又は色素沈着 ②多発性神経炎 ③慢性気管支炎 ④鼻中隔穿孔 の4点が基本。健康被害の重篤さを写真で伝えるには難しい症状だった。公害の健康被害といえば水俣病の重篤な急性劇症型をイメージするが、私も、そのような先入観を持って土呂久を訪ねた。告発された頃、押しかけた報道陣の名刺を一日に100枚も受け取ったと被害者の会会長を務めていた佐藤実雄さんが言っていたが、私が訪ねた頃はすでに土呂久鉍害がニュースになることはなかった。見た目の症状の軽微さが報道陣の熱を冷ませただ。しかし、その後、何度か土呂久を訪ねる暮らしぶりも含めて撮影させてもらおうと先入観は薄れ、自然豊かな山間地で静かに暮らすことの大切さを知ることになる。

閉山から10年以上経っていたこともあり、土呂久の暮らしは平穏を取り戻していたように見えた。しかし、亜砒焼きが1920年から始まり閉山までの間には村で語り継がれる佐藤喜右エ門一家7人が死滅した被害の他にも、墓地を巡れば多数の幼い命が奪われ、牛馬、農作物の被害は村人の正常な生活を奪っていたのだ。そのため、やむを得ず加害元の鉍山に働きに行かざると得ない村人も多かったと聞くことになる。

しかし、写真は今しか写せない。

土呂久を訪ねた当初は、衝撃的な告発的な被写体を探そうとしていたが、過去の鉱毒被害を探すより現在の自然に恵まれた土呂久の暮らしをそのまま写させてもらうことが、過去に鉱毒が奪った「土呂久の暮らしの価値」を伝えられるのではと考え至ることになる。

ちょうどその頃だった。水俣から「水俣の今を撮影しないか」と声が掛かった。

1973年7月に加害企業チッソと患者団体の間で補償協定が結ばれた後も、チッソと補償協定を結ぶにあたり自主交渉派のリーダー的役割を果たした川本輝夫さんは、水俣病の自覚症状があっても認定申請をためらう人びとや被害が潜在化している地域に出向き積極的に認定申請をすることを呼び掛けた。水俣病認定申請運動は、水俣病事件の被害の広がり进行を明らかにする運動でもあった。

そんな川本さんたちの認定申請運動があつて申請者は増え続け、1978年には認定とも棄却とも判断しない未処分者数が4695人にも達している。熊本県の認定審査会はパンク状態になっていた。それより前、1975年には熊本県議会議員が「認定申請しているのは補償金欲しさのニセ患者だ」と発言し問題にもなっていた。水俣病事件の被害を矮小化しようとする国、県と被害の実態を明らかにしようとする患者の闘いが続いていた。

私に声を掛けてくれたのは、認定申請運動の事務局を担当していた財団法人水俣病センター相思社。私の使命は、水俣病事件の被害の広がり进行を映像化することと、水俣病事件によって奪われた「そもそもこの土地にあった（厳存する）豊かな暮らし」を映像化することだ。土呂久で悩み考えた被害を見る視点が役立つと思えた。川本輝夫さんは私に「不可視の水俣病を撮らん」と、励ましてくれた。2年間、水俣病センター相思社の企画部職員として撮影に専念する機会を与えてもらった。その成果として写真集「水俣 1980 厳存する風景」を水俣病センター相思社の自費出版として発刊できた。しかし、患者の浜元二徳さんからは、「こん写真には俺たちの苦しさが写ってない」と批判された。「水俣から目を背けるな」と言われたように思えた。

初めて水俣を訪ねて41年。「不可視の水俣病を撮らん」という川本輝夫さんの言葉。「俺たちの苦しさが写ってない」と批判された浜元二徳さんの言葉。「水俣病の終わりということはないと私は思います」という坂本フジエさんの言葉。その他にも、水俣で出会い「真っ当に生きる」を身を以て示してくれた多くの患者や医師や学者や支援者たちの姿がリフレインする。今、胎児性の患者たちは60歳代半ばを迎えている。高齢化と共に体力や体の機能が衰え、日常生活さえも困難さが増している。40年経っても付き合いが浅いということなのだろう。私には、彼ら彼女らと言葉でのやりとりができない。目と目を見合わせて何らかの心情を交信することはできたと思うことも偶にある。水俣病から逃れることはできない彼らが、救われたと思えることとは何なのだろうか。存在そのものを肯定する「絶対共感」の他に思い付かない。

私にとって水俣病事件とは何かと考える時、生まれた時から水俣病を当たり前として生きてきた胎児性患者の胸の内に広がる光景を思い描く。つまり、写真家として今、水俣病事件を撮るということは、胎児性患者が言葉で伝えることのできない彼らの胸の内の光景を、共感を持って映像化することなのだと考えている。(了)